慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陶冶と構想力 : 陶冶論的立場から見たフンボルト美学について
Sub Title	Bildung und Einbildungskraft : Über die Ästhetik Wilhelm von Humboldts aus bildungstheoretischer Perspektive
Author	伊藤, 敦広(Ito, Atsuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.136 (2016. 3) ,p.29- 48
JaLC DOI	
Abstract	Die vorliegende Arbeit thematisiert die Ästhetik Wilhelm von Humboldts (1767–1835) aus bildungstheoretischer Perspektive. Die Hauptfrage lautet : Was ist die Ästhetik Humboldts und worum geht es bei ihr eigentlich? In welchem Verhältnis stehen die Ästhetik und die Bildungstheorie? Welche Begriffe der Ästhetik spielten in der Bildungstheorie Humboldts eine Rolle? Ungeachtet der Tatsache, dass das Thema ,,Ästhetik Humboldts" in der heutigen bildungstheoretischen Humboldt-Forschung nur wenig diskutiert wird, beschäftigte sich Humboldt in der in seiner Pariser Zeit verfassten Schrift ,,Aesthetische Versuche" (1799), in der er ein bürgerliches Epos Johann Wolfgang von Goethes, ,,Hermann und Dorothea" (1797), erörterte, nicht nur mit rein ästhetischen oder literarischen, sondern auch mit spezifisch bildungstheoretischen Fragen. Zusammenfassend lässt sich Folgendes sagen. Erstens : Das Grundprinzip der, Elementar-Aesthetik' (Humboldt), d.h. die Einbildungskraft, ist die Bedingung der Möglichkeit der ästhetischen Wirkung bzw. der ästhetischen Erziehung des Menschen. Zweitens : In der Dimension der Lebenswelt ist weder der Verstand noch die Vernunft, sondern die Einbildungskraft wesentlich. Drittens : Aus der Definition der Einbildungskraft ergab sich die für Humboldt charakteristische Wirklichkeitsauffassung und diese ermöglichte ihm ein Bild der Antike zu schaffen, das verschiedene Interpretationen erlaubt. Schließlich : Es gibt einen engen Zusammenhang zwischen der Lehre von der ästhetischen Wirkung und dem Bildungsprogramm einiger Museen in Berlin.
Notes	特集 : 教育学 寄稿論文

Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000136-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陶冶と構想力

――陶冶論的立場から見たフンボルト美学について――

伊　藤　敦　広*

Bildung und Einbildungskraft: Über die Ästhetik Wilhelm von Humboldts aus bildungstheoretischer Perspektive

Atsuhiro Ito

Die vorliegende Arbeit thematisiert die Ästhetik Wilhelm von Humboldts (1767–1835) aus bildungstheoretischer Perspektive. Die Hauptfrage lautet: Was ist die Ästhetik Humboldts und worum geht es bei ihr eigentlich? In welchem Verhältnis stehen die Ästhetik und die Bildungstheorie? Welche Begriffe der Ästhetik spielten in der Bildungstheorie Humboldts eine Rolle?

Ungeachtet der Tatsache, dass das Thema „Ästhetik Humboldts" in der heutigen bildungstheoretischen Humboldt-Forschung nur wenig diskutiert wird, beschäftigte sich Humboldt in der in seiner Pariser Zeit verfassten Schrift „Aesthetische Versuche" (1799), in der er ein bürgerliches Epos Johann Wolfgang von Goethes, „Hermann und Dorothea" (1797), erörterte, nicht nur mit rein ästhetischen oder literarischen, sondern auch mit spezifisch bildungstheoretischen Fragen.

Zusammenfassend lässt sich Folgendes sagen. Erstens: Das Grundprinzip der ‚Elementar-Aesthetik' (Humboldt), d.h. die Einbildungskraft, ist die Bedingung der Möglichkeit der ästhetischen Wirkung bzw. der ästhetischen Erziehung des Menschen. Zweitens: In der Dimension der Lebenswelt ist weder der Verstand noch die Vernunft, sondern die Einbildungskraft wesentlich. Drittens: Aus der Definition der Einbildungskraft ergab sich die für Humboldt charakteristische Wirklichkeitsauffassung und diese ermöglichte ihm ein Bild der Antike zu schaffen, das verschiedene Interpretationen erlaubt. Schließlich: Es gibt einen engen Zusammenhang zwischen der Lehre von der ästhetischen Wirkung und dem Bildungsprogramm einiger Museen in Berlin.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程（教育学）

18 世紀は，周知のように，体系性を備えた「学」としての美学成立の世紀である．『形而上学』（1739 年），『美学』（1750/58 年）を著したバウムガルテン（A. G. Baumgarten, 1714–1762）以来，美学は知性的認識の学である論理学には解消されない独自な学問領域としてドイツの哲学的議論の重要要素となった．バウムガルテンに従えば，美学は芸術の理論であるとともに感性的認識の学である．同世紀末においても，カント（I. Kant, 1724–1804）による超越論的感性論（transzendentale Ästhetik）を本質的部分として含む『純粋理性批判』（1781/1787 年）や，美的判断，趣味判断などを重要な主題とした『判断力批判』（1790 年）に端的に見られるように，18 世紀を通じて美・感性・芸術の学として美学の影響力は甚大であった．

一方で，18 世紀の顕著な特徴の一つを，近世以来の自然科学研究の隆盛に見ることができる．この時代，天使（純然たる知性的存在）でも動物（純然たる感性的存在）でもない「人間」（知性的かつ感性的存在）という対象の特殊性が，一般的に意識され，頻繁に論及されるようになった．人間を霊と肉，あるいは思惟実体と延長実体に区分し，前者に重きを置く伝統的な神学的，哲学的議論は，自然科学的探究の成果を反映し，次第にこの厳格な二元論の廃棄に向かう．これと同時並行的に生じたのが，世界周航を通じて西欧人によって「発見」された「野蛮人」がもたらした衝撃である．理性はあらゆる人間に平等に付与されているという従来の啓蒙主義的人間理解のみでは説明困難な，異質な新しい「人間」，「民族」の「発見」は，超時間的，超空間的な人間理解を空虚なものに思わせるとともに，感性の次元，すなわち歴史，風土，言語といった次元を含みこむ個別的人間理解を徐々に成立させることになる．その結果，知性と感性を包括する「全体としての人間（der ganze Mensch）」を考察の対象に据えた，「人間学（Anthropologie）」という新たな学問が成立する．知性的存在としての人間の探究が神学的，哲学的研究の継続とみなせることに鑑みれ

ば，新興の「人間学」の特性は，生理学，医学，比較解剖学といった，人間に対する自然科学的研究関心にあると見てよいだろう（これに対し歴史や言語などを基盤とする文化現象への関心は，民族学（Ethnologie）を経て文化人類学（Kulturanthropologie）に通じていく）．端的に言って，ここでも人間の感性的側面が着目されたのである．

1.『美学試論』というテクスト

本稿の目的は，18世紀から19世紀に生きたフンボルト（W. von Humboldt, 1767–1835）の陶冶論において，美学（Ästhetik）がいかなる意義を有するのかを検討することにある．感性への着目という共通の根をもつ，美学と人間学という二つの主題は，18世紀後半の代表的知識人たちとの交流の中で自らの思想を鍛えたフンボルトの立論も直接規定している．だが「比較人間学のプラン」（1797年）を中心とする一連の人間学的研究が比較的短い草稿群にとどまったのに対し，『美学試論』（1799年）は生前に出版された数少ないフンボルトの著書のうちの一つである．そのかぎりで美学という主題は，フンボルトにおける人間学，そして陶冶論を論じるのであれば避けて通ることはできない．

なお，ここで『美学試論』と訳したフンボルトの著書の題名は，正確には『美学試論　第一部ゲーテのヘルマンとドロテーアについて（Aesthetische Versuche. Erster Teil: Über Göthes Herrmann und Dorothea)』である．この著作はゲーテの市民叙事詩『ヘルマンとドロテーア』（1797年）を主題とし，それに批評を加えるものである．しかしこれは単なる批評にとどまらず，そうした批評の前提として，「芸術一般の本質」（FG, 2, 356）に考察を進めるものだった．この意味でこの著作は，フンボルト固有の美学研究として見られるべきものだと言える．

本稿ではこの『美学試論』およびフランスの読者に向けて書かれた「自著紹介」（1799年）を主たる対象テクストとして，考察をすすめる[1]．

2. 対象テクストの成立時期と受容の性格

「人間の真の目的」は諸力の陶冶であると説き，自らの自由主義的な国家観を披瀝した『国家活動の限界を決定するための試論』（1792 年）の出版を断念したフンボルトは，1794 年，当時の知的議論の中心地であったイェーナに移住した．当地でゲーテ（J. W. von Goethe, 1749–1832），シラー（J. C. F. von Schiller, 1759–1805）らを始めとする多数の思想家と交流を持った後，1797 年，イェーナを離れて総裁政府治下のパリへ赴く．パリでは自らサロンを開き，コンディヤックを哲学的支柱とするデステュット・ド・トラシー，カバニスらフランス観念学派（イデオロジスト）を始めとして，当時のフランスの第一級の知識人や政治家たちと交流した．1802 年からはローマ公使として教皇庁に派遣されることとなるが，『美学試論』はこのパリ時代（1797 年から 1801 年まで）に書かれたものである．

この著作は出版当初から，一般的には批判されるか完全に拒否された．フンボルト自身，「第一部」としながらもその続篇を執筆しなかったため，この著作は美学史においてもほとんど無視され，忘れられてきた．シュプランガーの研究を嚆矢に 20 世紀初頭から本格化するフンボルト研究史においても，ミュラー＝フォルマー（Müller-Vollmer 1967）を例外として，「フンボルトの人間学と人間陶冶の理論との関係における『美学試論』の役割，その本質的意義」は，まったく誤解されてきたと言われている（Menze 1988）．そのミュラー＝フォルマーは，フンボルトがフランスの読者に向けて書いた「自著紹介」をドイツ語に翻訳することで，『美学試論』の持つ独自性を改めて評価することを試みた．1980 年代以降になると，主として言語哲学との関係からこの著作の重要性が語られるようになり（Borsche 1981, 1990; Trabant 1986），これとの関連で，特にフンボルトのこの著作は「受容美学」の先行形態とみなせるという指摘もなされ，その現代性が説かれることにもなっている（Behler 1988）．とはいえこの著作が 90 年代以降の教育学研究，陶冶論研究において着目されることは

極めて稀である．ましてフンボルトへの論及自体が少なく，大抵の場合プロイセン教育制度改革実践（1809–10年）と結びつけて限定的にしか着目されないわが国の研究では，一見すると美学上の問題のみを扱っているように思われるこの著作が持つ重要性はまったく見過ごされてきたと言わざるをえない．だが仮に同時期の人間学的諸論考に見られるのと同じ陶冶論的問題関心が『美学試論』に現れているとするならば，当然のことながら，フンボルト陶冶論における『美学試論』の位置づけも修正しなければならないだろう．

3.『美学試論』を貫く関心と主要問題

『美学試論』の主眼はあくまでゲーテの叙事詩の批評にあり，紙面の大部分はその記述に割かれている．出版前年のシラー宛書簡では，この著作には「1. 芸術の真の本質を明らかにし，2. ゲーテの特性について説明し，3. 叙事詩の性質を究明して，叙事詩と叙情詩こそ他のすべてのものが含まれる主要ジャンルであることを示す」という3つの目的があると述べられている（An Schiller, 19. 4. 1798, 155）．こうしたフンボルト自身の発言から，たしかにこの著作は陶冶という問題圏からは外れているように思われるかもしれない．

にもかかわらず『美学試論』は，フンボルトの生涯にわたる陶冶論研究の一部とみなすべきものである．ゲーテと共同で『美学試論』の草稿を読んだシラーは，フンボルトの独創性を認めつつも，構想力によって作られた作品は構想力によってしか捉えられないとしてフンボルトのあまりに哲学的な方法を批判した（Schiller an Humboldt, 27. 6. 1798, 159）．この批判に応えてフンボルトは序論を書き直しているが，そこで「哲学的批評」は，「より高次の立場」に関係づけられる．

> この目標〔人間精神の努力の究極目標――引用者〕とは，人間精神を取り囲

> む世界とその内的な自己がそれに与える大量の素材を，あらゆる感受性の器官を用いて受け入れ，あらゆる自発性の力を用いて変形し，獲得すること，それによって自我と自然に，きわめて一般的で活発で調和的な相互作用をさせることである．〔……〕少なくとも，人間の心情の最内奥から発する芸術，偉大な独自性の刻印を受けた芸術作品を話題にするのであれば，この究極目標は決してなおざりにしてはならない．
>
> このより高次の立場を選択するならば，個別の対象をその外にある普遍的中心に関係させ，程度の差こそあれ広範かつ崇高な建造物の大部分に取りかかることになる．この中心とはすなわち，人間の陶冶である．この建造物とはすなわち，人間の心的能力（Gemüt）にありうる素質及び，経験が示す実際の相違の性格描写である（FG, 2, 127f.）．

ここに見られる自我と自然（世界）の相互作用という概念は，「人間陶冶の理論」（1794/ 1795 年？）でもまったく同じように論及されていた（FG, 1, 235）．フンボルトにとって，諸々の学問的研究は人間の陶冶という中心を持つ（さらにはそのための人間の性格描写という経験的人間学研究に通じていく）．この意味で純粋に美学的ないし文学的な関心からなされる研究であっても，それは必ず人間の陶冶という中心を持つものだと考えられる．であるがゆえに『ヘルマンとドロテーア』の詳細な分析が行なわれた後の結論部でも，次のように執筆動機が繰り返されて，論が閉じられるのである．

> そのような理論〔芸術論〕の完全な叙述が現れることが今ほど待望されたことはなかっただろう．なぜならそれは芸術を，人間とその内的本質に関係づけながら，これまで以上に道徳的な陶冶に密接に結びつけるであろうから．そして性格の内面的形式を陶冶して，確固たるものとすることが今ほど必要になったことはなかった．今は，情勢や慣習といった外面的形式が，きわめ

て恐るべき力で全面的な変革を迫っているのである（FG, 2, 356）[2].

ここには陶冶に対する関心が，正確には，時代の抑圧に対する「趣味の陶冶」への期待が明白に現れている．「芸術作品は偉大な行為のために最も高次で美しい感動を流し込むが，芸術作品は人間を自分自身へとさし向けることによってはじめて，人間を世界へと送りだす」（FG, 2, 143）という言葉には，芸術を媒介として諸個人を自己陶冶へと向かわせ，それによって社会，世界を改善するという発想が窺える．そしてこの時代認識と救済策は，初期の国家論はもちろんのこと，フンボルトの著作全体に通低するものである．美学研究もまったく同じ関心に導かれているという事実は，それがフンボルトの陶冶論研究の一環と見なすべきものであることを示していると言えるだろう．すなわちフンボルトの根本的関心は，シラーの言葉を借りるなら，「人間の美的教育」にあった．美学研究は，その背後にあるこうした関心のもとになされているのである．

なぜフンボルトが美学を論じなければならなかったのかは，こうした背景を考慮すれば理解可能なものになる．そもそも『美学試論』執筆に取り掛かる以前，1793年からフンボルトはシラー，ケルナー（C. G. Körner, 1756–1831）と共同で，カント美学を研究していた．そこで問題となっていた主要な問いは，「美的なものは概念によって客観的に規定できるのか否か」である[3]．カントは『判断力批判』で，趣味の客観的原理なるものはありえないとし，美は概念的，客観的に規定不可能だとした．だが，仮に趣味判断が単なる主観的判断となれば，「規則によって立法を行なうあらゆる美学の試みは無駄」である．もしそうなれば，人間の趣味の陶冶，美的教育など望むべくもない．

こうした問題意識からフンボルトは，『美学試論』の冒頭で「構想力（Einbildungskraft）の本性を研究することが，私の最主要の究極目的」（FG, 2, 126）だと述べ，構想力こそ「基礎美学の最高原理」（FG, 2, 127）

だとする[4]．そして結論部では，『美学試論』を貫く問いが「そもそもいかにして芸術家による美的作用が可能なのか」（FG, 2, 356）であったとしている．これは，シラーが構想したような美的教育はいかにして実行可能かという問いであり，美的作用の可能条件は何かというカント的な問いである．フンボルトはカント哲学研究をきっかけとして，美の客観的規定の可能性の検証を経て，美的作用の可能条件の分析に向かった．『美学試論』はこれにより，ゲーテの叙事詩の分析を議論の直接の主題に据えつつも，構想力の本性と美的作用の可能条件という二つの美学上の問題を集中的に扱うことになった[5]．以下ではこの二点に絞って『美学試論』を考察する．

4. 構想力と美的作用論
「現実のもの」と「理想的なもの」――構想力の規定

フンボルトは芸術一般の課題を，「現実のものを像に転化すること」（FG, 2, 137）と定式化する．ここでの「現実のもの（das Wirkliche）」という概念は，自然の内に実在するすべてのものを指す．現実を「像（Bild）」に変えること，「現実の対象としての自然を無化し」，「自然を自身の構想力の作品として創り直す」（Humboldt, M-V, 147）ことが芸術家の使命である[6]．像は「理想的なもの（das Idealische）」という概念で言い換えられ，「現実のもの」に対置される．ここで理想的なものという概念は二重の意味を持つ．第一が「非現実のもの（das Nicht-Wirkliche）」であり，第二が「あらゆる現実を凌駕するもの（Etwas, das alle Wirklichkeit übertrift）」である[7]．フンボルトはこの二重の意味を込めて，芸術家が生み出すものはすべからく理想的だと述べる．これは何を意味するか．

芸術家は自然，現実を素材として創作することで，「想像力（Phantasie）の王国」（FG, 2, 139），「可能的なものの領域」（ibd.）に入り込む．この領域ではあらゆる偶然が排除され，すべてが他のものに依存する．芸術家の創作活動においては，構想力のみならず，感性と知性が同時に働いてい

る．現実からセンス・データを素材として受け取り，それを合理的な仕方で処理することが創作の一つの前提条件になることから，そこで生み出される世界は，実際に現実に成立してはいないが存在しうる世界，いわゆる可能世界となる．芸術家によって生み出される世界は，目の前のリアリティーに対立する「非現実のもの」だという（第一の）意味で，理想的である．

とはいえ想像力の世界は，単に非現実であるだけではない．そもそも芸術家がこの世界を生み出すとき支配的に働くのは，知性ではなく想像力＝構想力である．想像力の世界の特徴は，その世界内部の事柄全てが相互依存状態にあり，完全な調和的統一をなしている点にある．しかし重要なことだが，想像力の世界の統一は「概念の統一ではなく，完全に単なる形式の統一にすぎない」（FG, 2, 140）．ここで「単なる形式の統一」とは，仮象としての統一，あるいは後のフンボルトの概念を用いるなら，多様な解釈を許す「シンボル」としての統一のことである（伊藤，2015）．この構想力の作品は概念で表現することはできず，「直観（Anschauen）」のみによって把握される．ここから芸術家の構想力がつくり上げる世界は，「すべての地点が全体の中心である領域，したがって全体が無制限で無限な領域」（FG, 2, 148）になる．この世界は，いかなる表現でも汲み尽せないという（第二の，より高次な）意味で，理想的である．

芸術とはこのような意味で，芸術家が自らの構想力を支配的に働かせて，自然，現実を「理想的」な像にし，それを作品という形で表現することである．フンボルトの定義に従えば，芸術は「構想力を法則に従って生産的に働かせる技術」（FG, 2, 138），あるいは「構想力による自然の表示」（FG, 2, 145）である．

このように，単なる知性による操作に解消されない芸術創作においては，構想力に特別な権能が認められている．陶冶論というわれわれの立場からは特に注意すべきことだが，この「産出的構想力」[8] の働きはいわゆ

る芸術創作という場においてだけ働くのではない．そもそもフンボルトは，カントを思わせる仕方で，人間の心の一般的状態を，知性，理性，構想力という三つの状態に区分していた（FG, 2, 139）．心的活動が行なわれるさいには，必ずこのうちのどれかが支配的に働くが，例えば「哲学者も詩人と同じく，支配的な思弁的理性に従属させなければならないとしても，構想力を必要とする」ため，何らかの豊かな成果をもたらす活動の場合「われわれの精神のあらゆる力は一緒に働いている」（Humboldt, M-V, 155）．知性は経験的知識を蓄積，分類，適用するときに，理性は経験から独立した諸概念を探究するときに支配的に働く．そして構想力は，人間が「制約のある有限な現実のただ中で，あたかもそれが制約のない無限な現実であるかのように生きる」（FG, 2, 138）ときに支配的に働くとされる．つまり先に芸術の創作活動に関して述べたように，人間は現実を構想力の働きによって「全ての地点が全体の中心である領域，したがって全体が無制約かつ無限である領域」であるかのように創りあげ，その只中で生きる．構想力は，人間が現実を生きている瞬間に支配的に働くのである．これに関し，ミュラー＝フォルマーは以下のように指摘する．

> 構想力は人間の文化世界，生活世界の認識にさいして重要な働きをする．それどころか，構想力はこの現実領域を解明するための道具そのものとなる．カントは『純粋理性批判』で現実概念を自然科学指向の認識理想と一致させた．人間の文化世界・精神世界の現実は，〔……〕そのような考察法においては当然考慮の外に置かれざるを得なかった．〔だが〕フンボルトにとって重要だったのは，まさにこの世界だったのである（M-V, 1967, 22）．

『純粋理性批判』のカントにとって問題とならなかった世界こそ，フンボルトが生涯探究しようとした世界である．言い換えれば，肉体を持ち，感情を持ち，言語を用いる有限な存在者としての個別的人間の世界こそが，

探求の対象となるのである．こうした領域では，芸術は特定の芸術的才能の持主だけが営むものではない．フンボルト自身の比喩を用いれば，すべての人間は「芸術家（Künstler）」（FG, 1, 76）に，その生の実践はすべからく芸術創作になり得るだろう．このとき構想力は文字通り「内に-像を作る-力（Ein-Bildungs-Kraft）」となって，人間の生の次元，そして世界像形成および自己像形成の場面，人間の自己陶冶の場面で決定的な役割を果たすと言える．像形成という場面に即して言えばこうなるだろう．人間は現実を生きるとき，常に像を創っている．仮に学問的・科学的知識を持たずとも，自分自身，他者，世界全体について常になんらかの認識，イメージ，すなわち仮象としての像を持ち，それを不断に更新しつつ生きている．このとき支配的に働く力，それが構想力なのである．

美的作用論

構想力がこのような性質を持つものであるとした上で，芸術家による美的作用の可能条件は何かという第二の問題に移る．この問いは，先の構想力の性質を前提にすることで，芸術家–作品の二項関係のみならず，芸術家–作品–鑑賞者（受容者）の三項関係を視野に入れて答えられることになる．

> 芸術家はわれわれの構想力に電気的ショックを与えるが，これはわれわれの構想力の命を目覚めさせ，われわれの構想力に，前に彼によって行われた仕事を繰り返し，彼の芸術作品の全体を通して，細部に至るまで，彼を追うように強いる（Humboldt, M-V, 123f.）．

ここでの「電気的ショック（le choc électrique）[9]」という語は単なる比喩ではない．パリで『美学試論』を発表する直前，フンボルトはイェーナで解剖学者ローダーの講義を聞きつつ，蛙や兎の解剖を含む解剖学研究・生

体電気研究を行なっていた（Jahn 2010）．いわゆる「ガルヴァーニ電気」の発見後電気は生命力の同義語となり，まさに生物の領域におけるニュートンの重力と同じ位置価を得たとされるが（Müller-Sievers 1993, 19），フンボルトがこの時期に発表した自然哲学的論考では，精神の領域と自然の領域を貫く同一の法則があると述べられている．すなわち，一種の生命力としての電気現象が，精神の領域にも自然の領域にもまったく同じように生じると考えられているのである．フンボルトの「自然哲学」に従えば，精神と自然を働かせている根本的原理は「男性的原理」と「女性的原理」であり，この婚姻によって新たなものの産出が行われる．そしてこれはフンボルトの陶冶思想の重要モチーフであった（伊藤 2014）．対立から綜合を生み出すこの一種の弁証法を背景とすることで初めて「電気的ショック」が「誘惑（Verführen）」と言い換えられる理由が分かる（Behler 1988）．電気という物理現象が両性間の相互関係のうちに生じる「誘惑」という語で言い換えられる事実は，ここでもフンボルトが性愛モデルを用いて「美的作用」を捉えているということを示している．

他者を誘惑して行為に向かわせるのとまったく同様に，美的作用は，受容者の構想力の自発性を触発することを意味する．したがって芸術家は自然に対峙して，自己の構想力の中でそれを像に転化し，感動的な気分になって作品という形で表現する．鑑賞者はこの作品という媒体を通じて，像を自発的に創造するように触発される．鑑賞者は作品と対峙する中で，自ら像を創造するのである（さらに言えば，芸術作品はこの段階ではじめて客観性を得るため，作品の価値は鑑賞者を欠いた形では成立しない）．鑑賞者の側のこの根源的な産出行為は，フンボルト自身によって知識学の「事行（Tathandlung）」という概念で言い換えられる[10]．美的作用とは，いわば作品と鑑賞者の幸福な婚姻であり，根源的な創造行為である．

美的作用が受容者の自発性から生じるとすれば，受容者の構想力がいかなる像を創るかについて，本来，根本的に予測不可能なはずである．だが

フンボルトはここで芸術家の意図という視点を放棄しない．鑑賞者の想像力を覚醒させるだけでは十分ではない．芸術家は鑑賞者の構想力に対して，自身を「追うように強いる」必要がある．そして芸術家は鑑賞者の構想力に「方向を与えなければならない．それゆえ目標を逃そうとしないのであれば，芸術家は自分自身と，彼の読者であるわれわれとの間に，完全な共感（sympathie parfaite）を作り出さなければならない」（Humboldt, M-V, 123）．偉大な芸術の条件も，この認識を背景として説かれることになる．偉大な芸術は素朴・単純な描写を通じて，鑑賞者が想像の中で自発的に像を創造するよう促し，これによって鑑賞者の気分を，芸術家が感じた感動的気分に一致させるのである[11]．

こうしたフンボルトの芸術観そのものが妥当かどうかは，もちろん検討されるべき問題だろう．いずれにせよ重要なのは，芸術作品を介した美的作用がそもそも可能だとすれば，受容者の自発性を考慮に入れないわけにはいかないということである．美的作用を受け入れる人間の能力は，知性でも理性でもなく構想力であり，これを目覚めさせ，共感を呼び起こせるか否か，（再）創造という形で受容者の応答を引き出せるか否か，これが美的作用における最も重要な要件なのである．

5. 陶冶論的立場から見た『美学試論』の意義

『美学試論』に見られる構想力の本性と美的作用についてのフンボルトの見解は，陶冶論上重要な帰結をもたらすと考えられる．

まず，これまでの論述から，なぜフンボルトが他者への働きかけとしての教育よりも陶冶に着目したのかが，改めて確認できるだろう．後年のプロイセン教育制度改革実践から生まれる「教育思想家」フンボルトというイメージとは異なり，フンボルトは教育を立法と同列に置いて，他者に対するこれらの働きかけの試みの重要性を認めつつも，哲学的な人間陶冶論の構築を先行させるべきだと考えていた[12]．『美学試論』の議論に基づけ

ば，構想力の自発性および，それによって成立する像形成（＝陶冶）という事実は，他者への働きかけの試みの前提とされなければならないということになる．これは他者への働きかけが無意味であるということを意味しない．むしろ人間の歴史世界，生活世界としての「現実」の形成に構想力が支配的に関与する以上，構想力への刺戟は人間の「世界の見方・世界の風景（Weltansichten）」そのものを全面的に変容させる可能性を有している．『美学試論』でフンボルトが提示した，芸術作品を介して構想力を触発するという試みは確かに間接的な働きかけのあり方である．しかしフンボルトにとってはこれこそ，立法や教育とは異なる次元で他者を美的に陶冶する重要なあり方であったと言えるのである．

古代ギリシャに対するフンボルトの態度も，この構想力論と密接に関係している．フンボルトは，1790 年代前半から古代の問題に取り組み，1806–07 年には「ラティウムとヘラス」と「ギリシャ自由国家〔共和国〕衰亡史」という重要な古代論の草稿を遺している．『美学試論』を執筆した後のこの時期には，シンボルとしての古代ギリシャの独自性が明確に意識されていた．フンボルトにとって古代ギリシャはシンボルとして，それを受容する者に美的な感動を与えると考えられるようになっていたのである．いかなる形であれ古代ギリシャに取り組むものは，古代と近代の間にある絶対的断絶を超えて，不十分な素材から自らの理想的像を創り出す．古代ギリシャはいわば，各人それぞれに異なる仮象としての「イデア」を創り出し，近代人の内に感動を生み出して自己陶冶へと向かわせるのである（伊藤 2015）．『美学試論』における構想力をめぐるフンボルトの立場から考えれば，古代ギリシャの偉大さが単純さ，素朴さにあるとされたのも，むしろそれらが受容者の側に構想力の自由な活動の余地を与えると見なされたからだと言える．総じて，美的作用論の発想が古代ギリシャ論の背景に存在すると言えるだろう．

パリ時代に完成されたこの構想力による産出モデルは，後に言語の考察

にも応用されることになる（Borsche 1981, 1990; Trabant 1986）．フンボルトの言語論についてここで詳しく述べることはできないが，フンボルトによれば，言葉の意味は主体が世界（最も広い意味での他者）と対峙する中で，自発的に創造するものである．この活動が主体に固有の世界の見方を作り上げる．「活動（エネルゲイア）」としての言語，「有機体」としての言語，コミュニケーションにおける「非理解」といった考えもここから生まれるのだが，こうした発想の背景に構想力による産出モデルがあることは容易に見て取れる[13]．『美学試論』以降関心が言語現象へ移ったとしても，フンボルトが行なった人間学研究としての言語研究は，美学研究，特に構想力の知見を背景としなければ考えられない．もちろんフンボルトの言語に対する関心は，青年期にヘルダーの『言語起源論』に触れて以来のものである．その意味では，言語の問題が早くからフンボルトの内に存在していたことは確かである．しかしそれが本格的に深まりを見せるのは，『美学試論』が書かれ，コンディヤック（及び観念学派）の思想からの影響やバスク語との接触があったパリ時代以降である．したがって，陶冶論と言語論の関係を考察する際にも，本稿で論じてきたような議論を踏まえる必要があるということになる．

このようにフンボルト陶冶論においては，美学論，古代論，言語論は構想力論を媒介として密接に関係し合っている．この事実からして，フンボルト陶冶論における『美学試論』の意義は明らかだと言えるだろう．最後に，紙面の制約上ここで詳しく触れることはできないが，フンボルトの美学と晩年のミュージアム実践についての関係について若干の示唆をしておきたい．周知のように，政治の表舞台から退いた1820年以降，フンボルトはベルリン郊外の自宅で研究に専念しその研究成果をベルリン王立科学アカデミーなどで発表しており，その集大成として上述の言語学的洞察を含んだ『カヴィ語研究』が死後に公刊された．しかし同時期にフンボルトがベルリンのアルテス・ムゼウムを始めとするミュージアム創設を巡る実

践に関わっていたという事実は，それに比べるとあまり知られていない．新古典主義の建築家シンケルを始めとする芸術家たちからなる「プロイセン国家における芸術の友の会」のプログラムを起草したフンボルトは，この会の活動内容，課題などを論じており，ここにはおそらくフンボルト独自の実践の試みを見ることができる．すなわち，芸術作品の展示を通じた国民の趣味の陶冶実践である．フンボルトの陶冶論及びその実践は，人間の諸力の自由な発展を妨げるとして公教育を有害なものと断じた『国家活動の限界を決定するための試論』や，その公教育制度の確立に尽力した制度改革期の文書を手がかりとして考察されるのが普通である．しかしこのミュージアム実践は，フンボルト陶冶論のもう一つの可能性を示唆している．そしてこの実践を陶冶論的に解釈するとすれば，本稿で論じてきた構想力の産出モデルこそが一つの重要な解釈枠組みとなるだろう．言語論およびミュージアム論についての詳細な論及は，今後の課題としたい[14]．

註

[1] フランス語の「自著紹介」に関してはミュラー＝フォルマーの研究書に所収されているドイツ語対訳に依拠する（Müller-Vollmer 1967）．

[2] 序文にも以下のようにある．「〔……〕この人間陶冶の哲学理論は，単に教育や立法といった個別的応用（これ自体はその原理における一貫した意味連関から初めて期待されてよいものなのだが）のための一般的基礎としてではなく，あらゆる個々人の自由な自己陶冶におけるより確実な導きの糸として，われわれの時代に特に重要な一般的要求である」．（FG, 2, 128f.）

[3] 「〔……〕戻ってからカントの批判の著作を改めて端から端まで読み通しました（これらはやはり法学の事柄における法典（Corpus iuris）と同じように，哲学の事柄におけるけっして手放してはならない法典（Kodex）なので），こうして改めて通読したことで，わたしはきわめて多くのことを得ました．たしかにかつて『純粋理性批判』に対して，そして二つの道徳に関わる著作に対してさえ懐いていたあらゆる疑いは，いまやまったく消え去りました．ですが『判断力批判』においてある手抜かりに，と言いたいのですが，改めて気づいたと思います．これは単に個々の文章を訂正するだけでなく，おそら

く最重要なこと，すなわち全体系の拡張を許すものです．われわれの美的判断の第一根拠についてどれほど研究を重ねてみても，主たる問題はつねに，依然として，美的なものは概念によって客観的に規定できるのか否かということにあります．カントが想定したようにもしそれができないとすれば，規則によって立法を行なうあらゆる美学の試みは無駄になります〔……〕．（An Körner, 27. 10. 1793, 1f.）

[4] 本稿では「構想力（Einbildungskraft, fr. l'imagination）」と「想像力（Phantasie）」を便宜的に区別しているが，フンボルトの著作ではこの二つの概念がほとんど区別されずに用いられている．

[5] 『美学試論』は「序論（Einleitung）」と104の章からなる．フンボルトの構想力に関する見解は，そのうち特に1章から12章に見られる．

[6] なお，フンボルトは「現実のもの」という概念を二つの意味で用いている．すなわち知性的に認識可能な「現象」という意味と，認識の及ばない「物自体」という意味で，この概念が用いられているのである．フンボルトが，「芸術家はじっさい，現実の対象としての自然を無化しなければならず，そうすることで自然を自身の構想力の作品として創り直す」（Humboldt, M-V, 147）と述べるとき，「創り直す（refaire）」という表現が示しているように，無化の対象となる自然は既に出来上がった自然，つまり理論理性によって構成された現実を指す．これに対し，以下のようにも言われる．「現実のものという概念に分ち難く結びついているのは，いかなる現象も個々に，それ自体で存在しており，いかなる現象も原因あるいは結果として他の現象に依存していないという事実である．というのもそうした依存関係はけっして現実に見られることはなく，つねに推論によってしか認識できないからであり，さらには，現実のものという概念自体が，依存関係を探すことすら無用なことにするからである」（FG, 2, 139）．周知のようにカント超越論哲学に従えば，「因果性と依存性」は純粋知性（悟性）概念（カテゴリー）の中の，関係のカテゴリーの下位概念であり，理論理性が成立させる現象である．理論理性が概念によって「現実」を知性的に解釈するとき，本来「混沌（Chaos）」にすぎないこの「現実」，「直観の多様」に秩序が与えられる．だが「物自体」としては，現実のもの，個体は言表不可能である（individuum ineffabile est）．理論理性では掴みきれないこの個体から生じる作用が，フンボルトの場合，「偶然」ないし「力」と呼ばれる．「現実のもの」は，感性と知性という媒介を経て改めて「現実」ないし現象として成立するが，そこにはつねに偶然が生じる余地が残るとされ，究極的には，因果の連鎖による説明を拒絶するという性質があると考えられている．

[7] これはドイツ語の「理想（Ideal）」が有する観念性と理想性という二つの意味を指す.

[8] カントと同様に，フンボルトは構想力を再生的構想力と産出的構想力に分類し，後者はあらゆる天才の行為を規定しているとする．Cf.（Humboldt, M-V, 151）

[9]『美学試論』では「ある種の生きた伝達〔……〕電気的な閃光（eine Art lebendiger Mittheilung … einen elektrischen Funken）」（FG, 2, 143）と呼ばれる.

[10] 周知のように「事行（Tathandlung）」はフィヒテ（J. G. Fichte, 1762–1814）の造語である．フンボルトは芸術作品を受容する側の根源的な産出行為を説明するために，明らかにフィヒテを意識してこの用語を用いている．構想力によって作られた作品は構想力によってしか捉えられないとするシラーに対し，フンボルトは以下のように述べている．「構想力の作品を捉える手がかりは，構想力それ自体しかないということは確実です．このことは他のあらゆる精神的妙技においてもまったく同じです．それはどんなものであっても，最も本来的かつ厳密な意味で，真の産出行為であって，内的かつ根源的な力の事行です．これを理解するには，自らそれをいわば模倣しなければなりません，つまりその非凡なエネルギーがそれを生み出したのと同じ力を働かせなければなりません」.（An Schiller, 12. 7. 1798, 166）

[11] ゲーテの叙事詩の偉大さもこの点から説明される（Behler 1988）.

[12] 註２も参照．この考えの背景には，啓蒙主義以来の人間の自律性，自発性への確信と，その裏面としての，偶然を生み出す「力」としての人間の根源的統御不可能性への確信がある．人間が根本的には統御不可能であると仮定した上で，いかにして他者に働きかけることができるか，特に他者を自己陶冶へ向かわせることができるか，これは陶冶論の側から見た近代教育学における重要な問いである．他のケルナー宛書簡では，同じことがいっそう明確に述べられている．「人間陶冶の理論についてはせいぜい教育と立法の理論があるだけで，宗教〔……〕の理論はありませんし，そして（あらゆるものの中で最も重要であろう）生活と交際による陶冶の理論もありませんし，最後にこれが最も悲惨で，われわれが持っているもの自体を揺らがせるものなのですが，一般原則の理論がないのです．教育と立法そのものは，これについて個々の応用を与えてくれるにすぎません」.（An Körner, 19. 11. 1793, 7）

[13] しばしば言われるように，各人が言葉に与える像は，当然各国語によって異なり，諸言語間の差異を生む．これを徹底すれば，一つの言語（例えば日本語）の内でも，想起される像は各人によって微妙に異なり，その微妙な差異

が波紋のように広がっていけば，ある意味では，あらゆる理解がすべて非理解になり，各人がそれぞれ別の言語を有することになる．個々人の言語感覚の差異は，集団によって形成される各国語の意味内容にも逆に影響を及ぼし，ここに有機体としての言語が現れてくる．

[14] 本稿は，2015年10月10日・11日に開催された教育哲学会第58回大会（於奈良女子大学）において，著者が一般発表を行なった際の原稿を加筆・修正したものである．

文　献

Humboldt, Wilhelm von (2010), *Werke in fünf Bänden,* hg. von Andreas Flitner und Klaus Giel, Bd. 2.〔略号をFGとし，巻数と頁数を付す〕

————, *Der Briefwechsel zwischen Friedrich Schiller und Wilhelm von Humboldt*, hg. von Siegfried Seidel, 2, Berlin, 1962.〔書簡からの引用は宛先人，日付，頁数を付す〕

————, *Wilhelm von Humboldts Briefe an Christian Gottfried Körner* (= *Historische Studien*), hg. von Albert Leitzmann, Berlin, 1940/1965.

Behler, Constantin (1988), „"Der Einbildungskraft ein Begehren einflössen": Humboldt und die Verführung der Kunst." In: *Kodikas/Code Ars Semeiotica*, 11, No. 1/2, Tübingen, 105–126.

Borsche, Tilman(1981), *Sprachansichten: der Begriff der menschlichen Rede in der Sprachphilosophie Wilhelm von Humboldts*, Stuttgart.

————(1990), *Wilhelm von Humboldt*, München.

Jahn, Ilse (2010), „Die anatomischen Studien der Brüder Humboldt unter Justus Christian Loder in Jena", In: *HiN Internationale Zeitschrift für Humboldt-Studien* XI, 21, 91–97.

Menze, Clemens (1988), „Kunst und Bildung in Wilhelm von Humboldts „Ästhetischen Versuchen" „ In: *Philosophie und Poesie: Otto Pöggeler zum 60. Geburtstag*, hg. von Annemarie Gethmann-Siefert, Stuttgart-Bad Cannstatt, 159–191.

Müller-Sievers, Helmut (1993), Epigenesis. Naturphilosphie im Sprachdenken Wilhelm von Humboldts, Paderborn/München/Wien/Zürich.

Müller-Vollmer, Kurt (1967), *Poesie und Einbildungskraft Zur Dichtungstheorie Wilhelm von Humboldts mit der zweisprachigen Ausgabe eines Aufsatzes Humboldts für Frau von Staël*, Stuttgart.〔略号をM-Vとし，「自著紹介」から

の引用の場合は Humboldt と併記する〕
Trabant, Jürgen(1986), *Apeliotes oder der Sinn der Sprache*, München.〔『フンボルトの言語思想』村井則夫, 平凡社, 2001 年〕
伊藤敦広（2014),「フンボルト陶冶論における自然哲学的前提」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学・心理学・教育学: 人間と社会の探究』77 号, 19–38 頁.
————(2015),「「他なるもの」の理想化としての陶冶 ——フンボルト陶冶論における古代ギリシャの意義——」『教育哲学研究』111 号, 53–71 頁.